

高等教育機関に在籍する聴覚障害学生の支援に関する研究

-支援学生の目的意識に着目して-

A Study on Support for Hearing-impaired Students Enrolled in Higher Education Institutions:
Focusing on the Sense of Purpose of the Supporting Students

○杉中拓央 (早稲田大学大学院) 土井幸輝 (国立特別支援教育総合研究所) 畠山卓朗 (早稲田大学)

Takuo SUGINAKA, Graduate School of Human Sciences, Waseda University
Kouki DOI, National Institute of Special Needs Education
Takuro HATAKEYAMA, Faculty of Human Sciences, Waseda University

Abstract: Recently, the number of students with hearing impairment who enroll in higher education institutions seems to increase owing to the early education with the hearing aid, but there are many difficulties in supporting them at present. Among the difficulties, there is an immature relationship between students with hearing impairments and supporting students, such as excessive interference or too much hesitation; therefore, the actual conditions should be comprehended. Accordingly, in this study, we administered an interview survey to understand the sense of purpose of the supporting students when they provided support to the students with hearing impairment in higher education institutions. This is the report on the qualitative analysis of their perspectives.

Keywords: Students with Hearing Impairments, Supporting Students, Higher Education, and Interview Survey

1. はじめに

日本学生支援機構(JASSO)発表の平成22年度「大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書」によれば、調査対象となった高等教育機関1,220校の中で、聴覚障害学生の在籍は387校、1,455名を数える⁽¹⁾。近年、乳幼児期からの補聴器装着が言語能力の発達を促すことが認められ⁽²⁾、地域の高等教育機関において聴覚障害者の進学率も高まると予想される。よって、各高等教育機関において聴覚障害者が持てる力を十分に発揮できる環境づくりが求められている。

地域の高等教育機関における聴覚障害学生の支援には、ノートテイクやパソコンテイク、手話通訳等といった情報保障がある。情報保障は、話者の発言を文字に置き換えて示すことで、聴覚障害学生の感覚代行を果たす支援である。しかし、単に講義や説明の内容がわかれば良いということではなく、笑い声や携帯電話の着信音といった、周りの学生が受け取っている全ての情報を掴み、聴覚障害学生がその場に参加していることを実感できる「参加の保障」がなされるべきという指摘⁽³⁾もある。高等教育は一般的に問題発見・解決能力を培う場とされており、座学に加え、グループワークやゼミといった、主体的参加を前提とした科目がある。聴覚障害学生が自然に講義へと加わり、自分の意見を問える環境を作るためには、周囲の学生や教員との関係性や、講義形式と支援のフィッティングを考慮する必要がある⁽⁴⁾。

著者らは、高等教育機関における聴覚障害学生支援の実態を把握すべく、高等教育機関に在籍経験のある聴覚障害学生に対して学生生活における困難の実態を調査⁽⁵⁾した。その結果、ノートテイクを務める支援学生からの過干渉や、同窓であるがゆえのはばかりといった、聴覚障害学生と支援学生の関係性の問題が明らかとなった。加えて、支援学生の聴覚障害学生支援に対する考え方や価値観は統一されず、支援時の共感的理解の形成に影響しており、支援学生が善かれと判断してとった行動が、時に聴覚障害学

生の負担となっていることがわかった。上述の結果を踏まえると、聴覚障害学生支援の充実のためには、支援に入る学生が何を考え、何を目的として支援に臨んでいるのかを把握し、支援者と被支援者の関係性において生じる問題の構造を検証する必要がある。問題を発見・解消することは、支援学生の支援者としての専門性を高めることに繋がり、聴覚障害学生の支援環境の構築に資する。また、調査によって得た知見を、支援学生育成の研修や、支援機器の導入の際の検討材料として提供し、支援の現場の改善に活かしていきたいと考える。

そこで本研究では、学内に障害学生支援の部署を持ち、支援学生の育成が行われている高等教育機関において、情報保障の形式として一般的であるノートテイクを手がける者(ノートテイク)に対し、どのような目的意識をもって支援に臨んでいるのかをインタビュー調査し、質的分析によって明らかにする。

2. 方法

2.1 調査参加者

2011年1月より2011年5月までの期間に、学内に障害学生支援の部署を有す高等教育機関において、ノートテイクを務める学生14人(平均年齢21.6歳、 $SD=2.2$)を調査参加者とした。質的研究の妥当性の担保について10から20人が必要という具体的な指摘⁽⁶⁾に則った。

2.2 調査と分析

半構成的面接によるインタビュー調査を行った。分析方法は、質的研究法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下GTA)⁽⁷⁾の方法論に従った。GTAは1967年にGlaserとStraussによって開発された質的研究法であり、医療・福祉・教育領域に実績がある。本研究においては支援学生の目的意識の体系的整理と把握を第一の目標に据え、その抽出の一助としてGTAの方法論を用いた。なお、本研究は早稲田大学学術研究倫理委員会の指針に基づいており、調査参加者には、研究の趣旨を十分に説明し、同意を得た。

3. 結果

発話データを GTA の方法論に従い分析した結果、【参加感の補完】、【学力の補完】、【精神的扶助】、目的意識への影響因として【志望動機】、【同窓・同世代性】、【講義の性格】、【合意の形成】、【適性への不安】、二次的目的意識として【共進・共生】、【無難な支援】、計 10 個のカテゴリを抽出した。カテゴリ間の関係性を可視化したものを Fig.1 に表し、以下に文章として示す。

支援学生はまず「一次的な目的意識」として、支援にあたって聴覚障害学生の【学力の補完】、講義の【参加感の補完】、及び聴覚障害学生に対する【精神的扶助】のうち、いずれかを重視していることがわかった。上述の選択に影響を与える要因には、支援に対する【志望動機】の影響があった。志望動機には、タイピングスキルへの自信や、速く書く術を習得したいといった技術志向、アルバイトとしての魅力や、キャンパスで働ける利点といった経済志向、障害を持った家族の影響や誰かの役に立ちたい気持ち、友人の聴覚障害学生を助けたいといった貢献志向があり、これらは複合していることがわかった。技術志向や経済志向に重点のある者は【学力の補完】に最初から目的意識が向くが、貢献志向に重点のある者は、まず【精神的扶助】へと関心が向きやすいことがわかった。また、上述の三つの志向は複合するものであり、そのバランスはそれぞれにおいて異なった。さらに「一次的な目的意識」は支援時に起こる目的意識への影響因との相互作用により、支援に臨む姿勢を示した「二次的目的意識」を喚起することがわかった。そのひとつは【共進・共生】のスタンスであり、もうひとつは【無難な支援】であった。

また、「目的意識への影響因」には、支援に入った【講義の性格】、支援をする聴覚障害学生との【同窓・同世代性】や【合意の形成】、自分自身の支援者としての【適性への不安】による影響が抽出された。【講義の性格】において講義の専門性が強いとき、双方に【合意の形成】をする必要が生じていた。また、【同窓・同世代性】による言いづらさが【合意の形成】の成否に作用していることがわかった。さらに【同窓・同世代性】の影響によって感情移入が起り、支援学生の目的意識が【精神的扶助】へ偏ることがわかった。支援学生と聴覚障害学生双方に【合意の形成】が十分に見られる時は、支援学生の意識が、聴覚障害学生との【共進・共生】へと向くが、合意が形成されず不十分である際は、支援学生は自らの【適性への不安】を感じ、保守化が起こることで【無難な支援】へと向かうことがわかった。【共進・共生】へと意識の向いた支援学生は『一次的目的意識』へと回帰し、聴覚障害学生との協議により支援の再検討を行い、ニーズを考慮した姿勢を持つことがわかった。

4. 考察

支援学生のサポートが、聴覚障害学生のニーズを捉えたものになるか否かは、ひとえに双方の合意の形成の有無にかかっている。合意の形成には同じキャンパスで学んでいるという同窓・同世代の関係性が絡み、ある時はコミュニケーションを促進し、またある時は支援外干渉や顔なじみゆえのやりづらさとなって阻害する。しかし、十分な合意があることで、ともに成長していこうという相補的な姿勢を育めることもある。ゆえに、同窓・同世代性をいかに取り扱うかという点が、双方の関係を左右するキーと考える。支援学生と聴覚障害学生のコミュニケーションの多くは忙しい講義の最中や前後に起こるものと推察され、双方の余

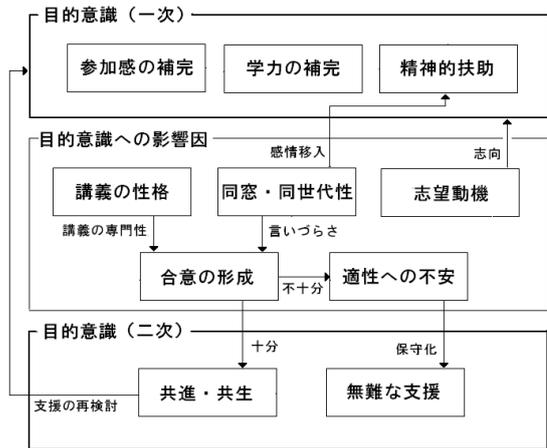


Fig. 1 支援学生の目的意識の構造

裕のなさが、相手の真意を得る前に対話を終わらせている可能性があるのではないだろうか。支援を務める学生の、支援者としてのキャリアの節目において、研修の一環として、時間を設け、聴覚障害学生のニーズや支援の嗜好、支援学生の技能や考え方を共有する機会や、支援を振り返る機会を持つことで、相手を知り、解消する問題もあろうと考える。今後はさらにデータを精査し、分析を深めることで構造を一般化し、研修等の改善に寄与することをめざす。

5. まとめ

本研究では、学内に障害学生支援の部署を持つ高等教育機関において、聴覚障害学生支援にノートテイクとして従事する学生に対し、支援に際しどのような目的意識をもって支援を行っているのかを調査した。調査によって得られた発話データを、GTAの方法論に準じコーディングした結果、一次的目的意識として【参加感の補完】、【学力の補完】、【精神的扶助】、目的意識への影響因として【志望動機】、【同窓・同世代性】、【講義の性格】、【合意の形成】、【適性への不安】、二次的目的意識として【共進・共生】、【無難な支援】、計 10 個のカテゴリを抽出した。今後は分析を深め、知見をわかりやすい形で支援の関係者に示し、及び支援学生の研修等の改善に活かしていく。

参考文献

- (1) 独立行政法人日本学生支援機構,平成22年度(2010年)大学,短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書,2010.
- (2) 庄司和史,四日市章,聴覚障害の早期発見に伴う0歳からの補聴器装着への教育的支援,特殊教育学研究,vol. 44, no. 2, pp. 127-136, 2006.
- (3) 高橋万由美,小林美穂,高等教育機関における聴覚障害学生への支援,宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要,vol. 28, pp. 305-317, 2005.
- (4) 杉中拓央,土井幸輝,畠山卓朗,聴覚障害学生の講義参加と環境因の関係,第26回リハ工学カンファレンス論文集,pp. 185-186, 2011.
- (5) 杉中拓央,土井幸輝,畠山卓朗,高等教育において聴覚障害学生が抱える具体的困難の抽出,日本生活支援工学会誌,vol. 11, no. 1, pp. 26-33, 2011.
- (6) メリアム,S.B.(著)堀薫夫(訳),質的調査法入門 教育における調査法とケース・スタディ,2008.
- (7) ウィリッグ,C(著),上淵寿,大家まゆみ,小松孝至(訳),心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて,2003.